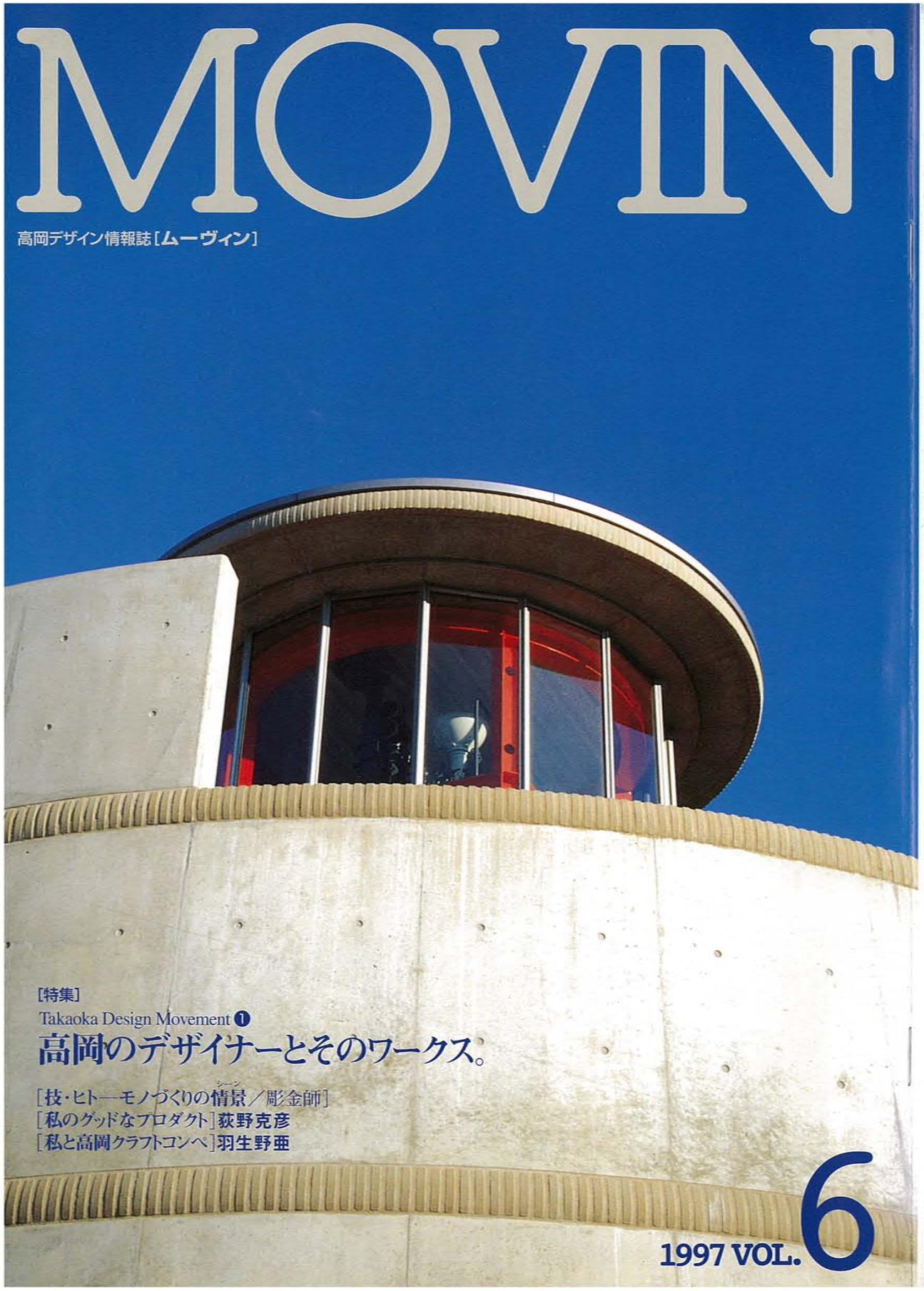
MOVIN

高岡デザイン情報誌［ムーヴィン］



［特集］

Takaoka Design Movement ❶

高岡のデザイナーとそのワークス。

［技・ヒト―モノづくりの情景（シーン）／彫金師］

［私のグッドなプロダクト］荻野克彦

［私と高岡クラフトコンペ］羽生野亜

1997 VOL. 6

街角デザインフォーカス

『高岡シビックロード』（延長450m）は、古城公園と美術館を核とする「高岡文化の森」とを結ぶ。いわば、文化と芸術の薫りを楽しめる散策路である。アルミ鋳物製の街路灯やベンチなどのストリート・ファニチャーが高岡らしさを醸し出し、新しい景観を演出している。古城公園側の空中歩道には、エレベーターや休憩スペースが設けられている。お年寄りやハンディキャップを持つ方々にも安心して楽しめる配慮がなされているのも"市民のための道"ならではのことであろう。

※表紙写真：高岡シビックロード（空中歩道）

高岡デザイン情報誌［ムーヴィン］

VOL.6　1997年3月31日発行

写真提供・取材協力

株式会社アイクス
天野漆器株式会社
イナダデザインスタジオ
鋳物工房利三郎
株式会社大野屋
荻野克彦デザイン事務所
鍛冶産業株式会社
坂口税理士事務所
佐野宏行
助野靴下株式会社
高岡市教育委員会文化財課
高岡市建築指導課
高岡市公園緑地課
高岡市工芸デザイン指導所
高岡漆器株式会社
高岡市道路建設課
高岡市ふれあい福祉センター
高岡商工会議所
財団法人高岡地域地場産業センター
高岡銅器団地協同組合
株式会社タカタレムノス
株式会社竹中製作所
富山インダストリアル・デザインセンター
社団法人富山県デザイン協会
なかやす酒販株式会社
株式会社ニューズ・インターナショナル
畠山制作室
羽生野亜
菱富食品工業株式会社
株式会社光岡自動車
株式会社山口久乗
ワシアルミ株式会社　（50音順・敬称略）

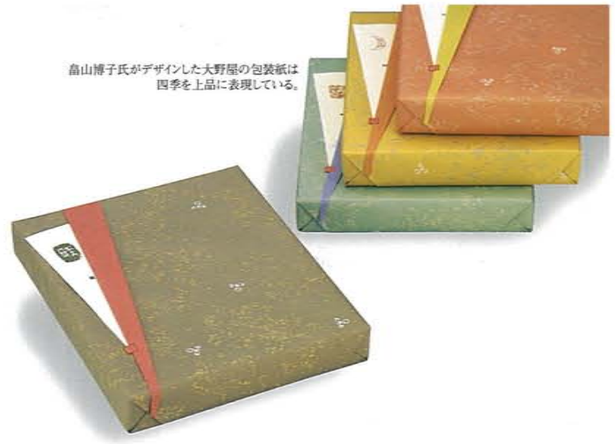
STAFF

Published by　高岡市中小企業課
〒933　富山県高岡市広小路7-50　TEL(0766)20-1285
Executive Editor　MASAYOSHI KIMURA
Art Director　HIDEAKI SOUMA
Designer　YUKIKO AZUMA
KAZUYA NAKAJIMA
TAKAKO NISHIKAWA
Writer　AZUSA HASE
RIE MORINAGA
MASAHIRO YOSHIZAKI
Photographer　YOUICHI ISHIHARA
EIJI HONBO
Printed by　相互企画印刷㈱

MOVIN'<ムーヴィン>は、MOVINGの略形で、「動く」・「進展する」・「感動させる」という意味を持ちます。

デザイン情報誌<MOVIN'>は、高岡の街や人、企業そして行政の動きを"デザイン"というアンテナでキャッチ、ユニークな切り口でご紹介します。
また、MOVIN'は高岡独自のデザインパワーを市内外に発信していくとともに、高岡の未来に向けて「新しいデザインの動き」を生み出していく情報誌を目指しています。

ISSN　0918―7111



畠山博子氏がデザインした大野屋の包装紙は四季を上品に表現している。

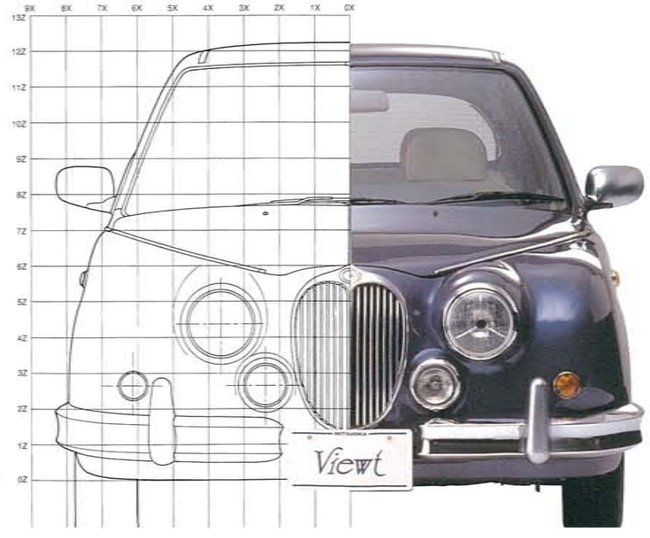
Takaoka Design Movement ❶

高岡のデザイナーとそのワークス。

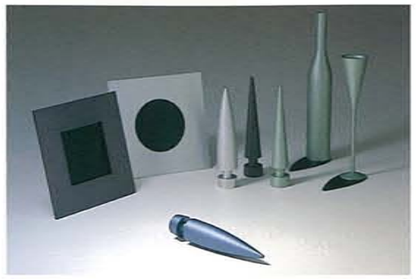
いま、高岡のデザイナーは何を考え、どう動こうとしているのか—。

企業内、制作会社、あるいはフリーランスと、その立場は異なっても、デザイナーの仕事の多くは、地域の産業や文化、生活や環境などと密接な結び付きをもつ。高岡を拠点に活動しているデザイナーも、またそうである。
デザインのフィールドはさまざまだが、いま、高岡でエネルギッシュに活動を続ける三人のデザイナーに、それぞれの仕事の考え方やこだわりをうかがってみた。

相川繁隆氏が制作した「ダブルオープナー」
上部のハンドルはスクリュー部分のキャップになる。
（共同制作：喜多登）



中田敏幸氏がデザインした光岡自動車「ビュート」は1/1スケールのクレイモデルを自らが手掛けた。



竹中製作所から販売されているテーブルウエア

マーケット、技術、コストの意識がインハウスデザイナーに必要

「インハウスデザイナーだからといって、ただ漠然と会社の指示どおり動いて、個性を失うことは避けたいと思います。デザインスタッフがそれぞれ経営者という意識で切磋琢磨していけば、自ずと会社に貢献していけるはずですから」と話す、竹中製作所デザイン室長の相川氏。当社は高岡銅器をベースに多岐にわたる分野で、デザイン重視の商品開発を行っており、デザイン室はおよそ三十年前に設立された。

デザイン室では自社ブランドだけでも年間二〇～三〇点の商品開発をしている。最近では車止めやベンチといった景観分野の商品も多く手掛け、デザインの領域は広がっている。「魅力的な商品開発をするのはインハウスデザイナーとして当然ですが、同時に流通の開拓や製造技術にも直接関わり、価格や製造コストに対する責任もあります。こんなことを含めて商品開発に携わります。昔は素材の大部分が金属でしたが、今はガラスやプラスチックなども使いはじめ、日本各地、時には外国からも素材や技術を調達するようになりました。色々な素材と付き合って、金属の加工技術にはベーシックな要素があったことに気付きました。プラスチック、ガラス、陶器にも鋳造技術とよく似ている技術があります。金属で得た知識が応用できるので他素材の技術的なこともスムーズに対応できました。技術の知識がないと加工やコスト面で問題が生じたときに、方法を変えるという発想もでません。おそらくフリーランスの場合ですと、技術面はメーカー任せになると思います」。

竹中製作所では著名デザイナーを起用した商品開発も多く、対応は必然的にデザイン室となる。「このケースではちょうど通訳のような立場になります。デザインを一緒に具現化しながら技術や素材、コスト面などの調整を図ります。そのためデザインや素材の変更もあります。黒川雅之氏（建築家・プロダクトデザイナー）がデザインしたルーペとメジャーも最初は金属の予定でしたが、重たく感触も冷たい、ファッショナブルじゃないしコストの問題もある。そんな話を黒川さんと進めて素材をプラスチックに変えました」。

Shigetaka Aikawa

相川　繁隆
クラフト・プロダクトデザイナー／㈱竹中製作所デザイン室室長

1952年石川県松任市生まれ。'76年金沢美術工芸大学工芸デザイン科鋳金卒業後、㈱竹中製作所デザイン室入社。'90年デザイン室室長。'78年「第1回ジャパン・エンパ賞美術展」佳作賞。'83年「'83とやまの作家展」招待・高岡市立美術館長賞。'87年「京都デザインコンペ'87」銅賞。'90年「伊丹クラフト展」銅賞。'93年「京都デザイン大賞・指名コンペ特別記念展」招待。'94年「ジャパントラディショナル・漆文化展」招待。'97年「かわさき産業デザインコンペ'96」優秀賞。「工芸都市高岡クラフトコンペ」'89年金賞、'91年グランプリ、'92年奨励賞。他、入選受賞多数。日本クラフトデザイン協会会員。

クラフトとプロダクトに対する自分なりの回答を発見したい

相川氏は地元で開催されている全国公募の高岡クラフトコンペをはじめ多くのクラフト展で受賞歴がある。一方ではプロダクトのコンペでも受賞するなど異なるジャンルでも評価を得ている。二つのジャンルにおける取り組み方やテーマの違いについて相川氏はこう語る。

「日本ではクラフトとプロダクトを別ものと位置付けていますが、私の意識の中ではどちらも同じ存在です。敢えて分けるならば手の匂いの強弱といえるでしょうか。例えばログハウスをハンドメイドで作るとクラフトで、量販するとプロダクトといわれる。また、試作中の商品は人間の手が介在するのでクラフト、生産段階にはプロダクトになってしまう。ただ、僕なりにクラフトに対するひとつの回答を四十代で見つけたいと思います。今年プロダクトとクラフトの展示会を予定しています。同時平行というかたちでこの二つを主張していくことになりますが、おそらく何らかの共通性を見いだせると私自身楽しみにしています。いずれにしても、クラフト、プロダクトと区分するのではなく、お互いを結び付けていけるポジションを見いだし、世の中へ問いかけていくモノづくりをしていきたいと思っています」。

かわさき産業デザインコンペ'96優秀賞受賞作品「WAVE」
（共同制作：井川浩志）

高岡'96クラフトコンペ入選作品「炫（ゲン）」

メタルアーチストとのコラボレーションで広がるデザインワーク

「いいものを見たい、触りたい、身近に置きたい、といった自らの欲求をどんどん膨らませカタチにすることが、デザイナーとしての私の原点です。私が心地いいと感じる色彩や素材を組み合わせながらデザインしたものが、人や空間にどんな影響を与え、変わっていくかということに興味がありますね」と話すグラフィックデザイナーの畠山博子さん。畠山さんはご主人の耕治氏(メタルアーチスト)が主宰する「畠山制作室」を拠点に、パッケージデザイン、VI(ヴィジュアル・アイデンティティ)、CI(コーポレート・アイデンティティ)、色彩計画など幅広い分野で活躍している。

パッケージデザインの主なものでは和菓子の老舗「大野屋」や「菱富食品工業」などがあげられる。大野屋では全体のパッケージをはじめ販促物、制服の提案と多岐にわたる。富山今泉店では耕治氏が総合プロデュースを、畠山さんはその色彩計画を担当するなどパッケージデザインだけに留まらない。

ご主人が作家活動を続け、一方では環境デザインや建築物を演出する作品づくりもされていることから、畠山さんは「空間デザインの色彩計画に携わるチャンスが増えてデザインの幅は明らかに広がりました」と話す。メタルアーチストの耕治氏とのコラボレーション(共同制作)がデザイン活動に厚みを増しているといえる。

CIの最近作としては坂口税理士事務所がある。紙面の都合上、手法の紹介はできないが、仕事の進め方をうかがった。

「CIに限らず、私たちはクライアントといかに密接な関係を維持して仕事を進めていくかを重視します。オーナーの夢や考え方、求めるテイストなどを、深いレベルで理解したいため仕事以外のお付き合いを多く持つようにしています。こうしてはじめてクライアントの考え方を咀嚼(そしゃく)して提案できると思うのです。非効率的と思われるでしょうが、こういうスタイルがベストだと思います」。先のCIも、このポリシーのもとに進められた。ペン一本も税理士事務所としての重要なアイテムということから銘柄指定するなど、その計画は細部にまで及ぶ。

Hiroko Hatakeyama

和菓子の伝統と新しさを表現した「大野屋のパッケージ」

畠山　博子

グラフィックデザイナー／畠山制作室

1958年高知生まれ。日本色彩学会会員、安川ファッション・アート専門学校色彩学講師。
1980年金沢美術工芸大学商業デザイン科専攻卒業。'90・'92・'96年、日本パッケージデザイン大賞展入選。'96年名刺コンテスト黒木靖夫賞。日本パッケージデザイン展'96とやまパッケージデザイン賞受賞など。

デザインを通して、社会との関わりを考える

畠山さんは「色彩」への探求心が旺盛で、デザインの中でも大きなウエイトを占めるという。色に関するユニークな活動に「パーソナルカラー」というワークがある。主にファッションに関するカラーコーディネートである。簡単に言うと、イメージだけでコーディネートするのではなく、色々な要素をチェックしながらその人のベストカラーなどを導き出すというアカデミックな内容で、企業からの講演依頼も多い。「この活動を通じて、一般の方がデザインを理解し実践できる人が一人でも増えてほしいと願っています」。大賀裟に言えば、一般市民へのデザイン啓蒙活動ということであろう。

「高岡全体で見れば、私たちの行うCIや空間デザインなどは小さな動きかも知れません。しかし高岡を構成している個々の建築物などのデザインを積み重ねていくことで、街はもっと魅力的になると思うんです。パーソナルカラーも人へのデザイン活動で、高岡を素敵にしていくための一歩ですから。モノをつくるとかデザインという行為は、それを通して社会とどう関わっていくかということだと思います。今後もこのコンセプトでもっとパワフルな活動を続けたいと思います」。

坂口税理士事務所VI(事務所の内外装もコーディネートされている)

「ビュート」のレンダリング

ちょっと、古い、クルマ 光岡自動車"ビュート"との出会い

「この世に存在するほとんどのレプリカはかつての名車である。そして、いわゆる名車というものはそれなりに偉いわけで、尊敬を集めている。その名車をコピーして作るという行為に対し、反対の意を表す人がいても不思議はない。制作途中では毎日『オリジナルを踏みにじる行為なのか』と自問自答していたが、完成した車を見ていると、可愛らしく、何よりも自分自身のノスタルジーも満足させてくれた。この『ちょっと、古い、クルマ』を近代的な装備で毎日走らせることができる。これはこれで意義があり、新しい価値を誕生させる。デザイナーにとって心踊る行為だと思う。しかし、本当の答えが出るのはお客さんの評価を待たなくてはならない。不安であるが楽しみでもある」。これは光岡自動車(富山)のオリジナルカー「ビュート」のデザインに携わったプロダクデザイナー中田氏が、第一号の完成時に綴った一文である。

「光岡自動車」は日本で十番目となった自動車メーカーでご存知の方も多いはず。ビュートはジャガー・マークⅡがモチーフで、マーチをベース車として開発された。光岡自動車からこの企画を聞いた時、中田氏自身も五〇年代の英国車ファンだったので「仕事冥利に尽きる」と感激したという。

ビュートのデザインについて中田氏はこう話す。「厳密にいうとビュートはレプリカとは違うんです。本来、レプリカは実物から直接型を取るので外観はまったく一緒です。ビュートは、モチーフ車とベース車とのサイズが違うためスケール、ディテールとも随分異なっています。ビュートのデザイン上のポイントは、ライトを外側から四〇センチ以内と規定ギリギリの位置まで寄せていることです。こうすることで愛くるしい顔つきが生まれました。現代車の多くはライトが端に離れています。もちろん車幅を認識しやすいのですが…でも私にはとても無機質に映ります」。

㈱光岡自動車「ビュート」
(写真提供：光岡自動車)

Toshiyuki Nakada

中田　敏幸

プロダクトデザイナー／㈱アイクス代表取締役

1950年高岡市生まれ。地元の高校を卒業後、いすゞ自動車に入社。車体設計部を経てデザイン室に勤務。退社後、デザイン会社を経て高岡へ戻る。㈱アキデザインに入社、その後グループ会社㈱アイクスを設立。カーデザインをはじめ建材関連の商品開発からプロダクト・グラフィックデザイン、インテリアプランナーと幅広く活動。
「第10回国民文化祭とちぎ'95 工業デザインフェスティバル」入賞。「富山プロダクトデザインコンペ」'94年デザイン優秀賞、'96年デザイン賞。

自分の感覚だけを頼りに実物大の立体モデルを制作

車のデザインはまずボディーのデザイン、つまりアイデアスケッチ、次にレンダリング(完成想像図)、続いて立体造形のモデリングという段階を経る。プロダクトは平面だけではなく図面から立体に再構築して、実際の目線で検討しないと解らない部分が多いと中田氏は語る。

「立体となる1／1スケールのクレイ(粘土)モデルはアイボーリング・ワークという自分の感覚を頼りにする制作方法です。ビュートのバランス、動き、形の主従関係など構成要素や配分を盛り込みながら作業を進めていきます」。クレイの温度はおよそ六十度に温められる。これを素手でこねて盛り付けするので掌が真っ赤になり皮が剥けるという。クレイモデル完成後は光岡自動車でFRP(ガラス繊維強化プラスチック)のマスターモデルの制作、そして一号車の製造と簡単に言えばこうなる。

「ビュートは今でこそ多くのユーザーに愛されていますが、デザインの段階で『これでいこう』と決断された光岡社長の先見力はすごいと思います。しかも、来年からは輸出の予定もあります。私は社長をはじめ光岡自動車さんの商品企画の中でデザインにベストを尽くしただけですが、ビュートの仕事を通してデザインの力を改めて感じました。ビュートの価格はベース車の倍です。にもかかわらず人気は今も続いているからです。私はユーザー・フレンドリーという関係を大切にしていますが、これからもユーザーの立場に立ってデザインしていきたいと思います」。

(右)富山プロダクトデザインコンペ'94 デザイン優秀賞受賞作品『浴室の出窓』
(左)富山プロダクトデザインコンペ'96 デザイン賞受賞作品『ルーフボックス』

【技・ヒトーモノづくりの情景（シーン）】第一回／彫金師

スーッと一本の鏨（たがね）を手にする。
一見、無造作に映るこの瞬間、
形や大きさが微妙に異なる数十本の鏨の中から、
表現しようとする「線」を描くために
最適な一本を選び出しているのである。
無垢の金属面に彫られる一本の線は、
溝の深さと角度、素材の種類や硬さ、
そして鏨の形によって表情が異なる。
鏨を打つ旋律は、職人ひとりとして同じものはなく、
聴いただけで、誰が打っているかわかるという。
素材と道具、それに手技が奏でるハーモニーから、
モノづくりのこだわりが伝わってくるようである。

①鏨はすべて彫金師自らがつくる。素材には炭素鋼やハイス鋼を使用し、鍛造から刃の研磨までの工程を行う。微妙に異なる刃先が彫り溝の違いとなり、彫金師の個性が反映するといわれる。
②鏨は、刃鏨と打ち鏨の2種類に分けられる。形は彫金師によって特徴があり、使用する本数もさまざまである。
③金槌は、鏨を打つ他、鋳物表面の打ち出しや鎚目を付ける際に用いられる。用途によって形や大きさが違う。

基本は、彫る前に学ぶもの

佐野氏の作業場に並ぶ数十本の鏨は、彫りの種類や鋳物の硬さに応じて使い分けられる。最適な一本を選び出し、思い通りの線を彫り込むためには、まず鏨や鋳物の特性を熟知していなければならない。二十歳で父・甚吉氏に師事した佐野氏の修行は、鏨づくりから始まった。職人気質の父は、親子といえども決して手取り足取り教えることはない。最初は見よう見まねでつくるしかなかった。思い通りの鏨がつくれるまでには、二年の歳月を要したが、試行錯誤を繰り返すうちに、彫金師としての基本をマスターしていたという。

緊張感も仕事の醍醐味

同じ鏨を使っても、力加減や打ち込む角度によって彫り溝が微妙に違ってくる。失敗が許されない彫金の作業には、ひと彫りごとに細やかな神経と集中力、そして永年の経験と勘が不可欠である。仕上げの鏨を打ち込む瞬間は、作業場全体が独特の緊張感に包まれる。

佐野氏の仕事からは、真剣勝負に挑む職人の情熱や道具への愛情を垣間見ることができる。作品に温もりを感じるのは、そんな人柄が映し出されているからかも知れない。

佐野　宏行（さの　ひろゆき）

1944年高岡市横田町生まれ。
1964年に父・甚吉氏に師事。23歳で日本伝統工芸展初入選。1974年に日本工芸会正会員になる。1986年に独立。主として花瓶の彫金・象嵌を手掛ける。

■高岡の彫金

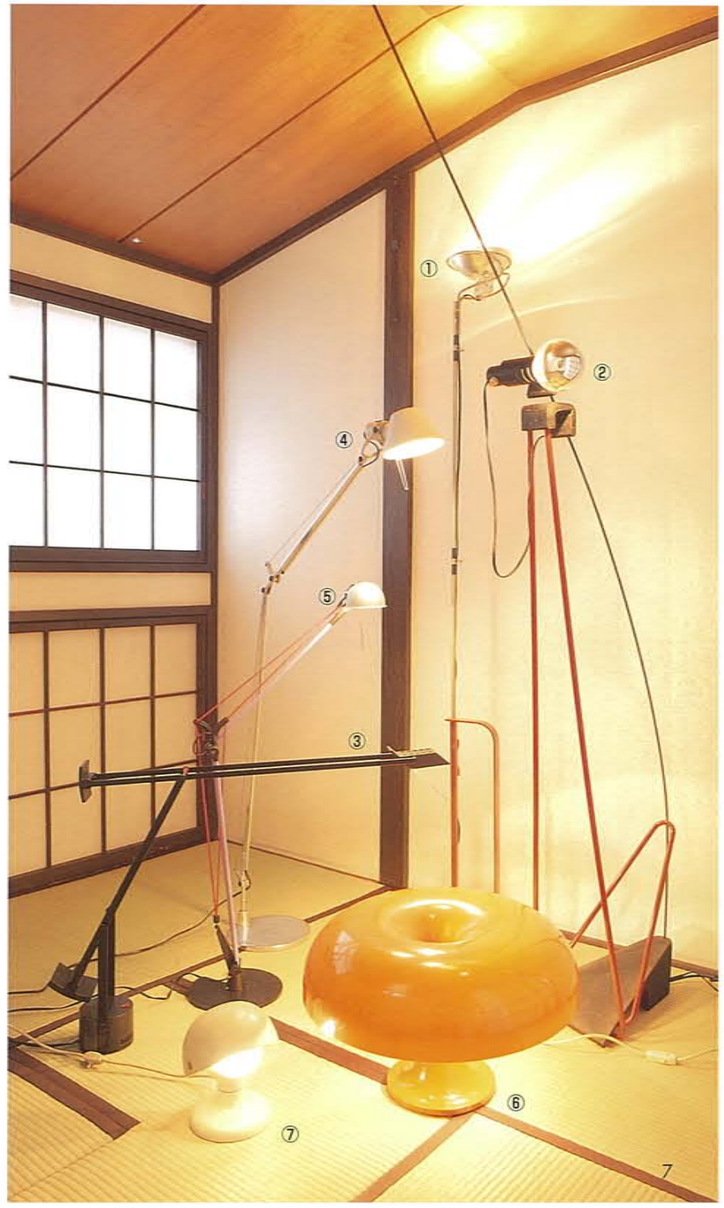
鏨を使って金属にさまざまな模様を彫り込む彫金。その彫り溝に異なる金属をはめ込む象嵌（ぞうがん）。これらの技術は、明治初期から昭和初期にかけて加賀象嵌の技術を取り入れながら高岡独自の発展を遂げた。彫金では毛彫や片切彫、象嵌では線象嵌、布目象嵌などに高岡独特の技術が見られる。

荻野　克彦（おぎの　かつひこ）
プロダクトデザイナー／荻野克彦デザイン事務所代表

1944年生まれ。
（財）日本クラフトセンタージャパン理事、（財）伝統工芸品産業振興協会デザイン研究委員。
家庭用機器などのデザインを行う一方、地場産業振興のための製品開発、販売活動を行っている。高岡市では工芸都市高岡クラフトコンペの設立準備に関わり、これまで4回審査員を務める。96年より同市デザインアドバイザー。

MY SELECT GOODS 1
私のグッドなプロダクト

イタリアの伝統的な職人気質が生んだ照明器具。



私のデザインは「実用に関係ないところにいくら恰好を付けても意味がない」というものだ。むしろ素材と技術、構造や機構を考えながら「物を作る」こと自体が好きなのだ。従って日頃は「物持たざるは豊かなること」と決め込み、物品に執着することがない。必要な物があれば「形八直二心ナル所」と考え、自分のスタンスで見る。自分の「暮らし方」に最も適した物であれば入手し、他は妥協しない。他人を意識して恰好を付けたところで自分自身、不便だったり不自由を感じるようでは最悪であり実際無駄なことなのだ。

さてテント暮らしに近い一室多用の生活をしている私には、画一的な空間を更に均質化してしまう蛍光灯など、全体照明は考えられない。写真のような照明器具こそ不可欠で三十年近く使っている物（①）もある。夜ともなれば昼以上の視覚空間をこれらの器具は創出してくれる。簡単に移動できるスタンドの利点に加え、単純な支柱のスライド（①②）で、ヤジロベエの原理（③）やテンションのバランス（④⑤）で光源の位置が大きく変わる。素材の表情を生かして光を形にしてしまう（⑥）。シェードの角度で調光する（⑦）など、多様な光は画一的な空間に個性と可能性を与えてくれるばかりか、消燈時でさえ造形化した原理や構造を「形」にして、再び鑑賞する楽しみを与えてくれる。全てが今日の工業技術を駆使しながらも、伝統的な職人気質によって製造されたプロダクツ。効率優先の環境からは決して生まれることのないイタリアならではのデザインだ。

（文／荻野克彦）

① トイオ（フロス社）
② ブルーベル（フォンタナアルテ社）
③ ティチオ（アルテミデ社）
④ トロメオ（アルテミデ社）
⑤ クリケット（アルテミデ社）
⑥ ネッソ（アルテミデ社）
⑦ ジョーカー（フロス社）

荻野氏の自宅（阿佐ヶ谷）にて撮影

DESIGN TOPICS

［96年度デザインの動向］

（上）利三郎店内、（右）外観

古川通泰画ラベルの限定酒販売

オリジナルラベルで新たな地酒ファンを獲得

かつてフランスのワイナリーには、ピカソやシャガールの絵をボトルのラベルデザインに使っていたオーナーがいたという。そんなエピソードにヒントを得て清水町にある酒店、なかやす酒販社長の中山安治さんが昨年、富山の画家が描いた絵のラベルを張った地酒を企画。「越のくに狐」という名の日本酒（一・八リットル一万二千円）を限定販売した。

地酒は県内唯一の杜氏、吉江美一氏（吉江酒造）が地元の米と水を使って大吟醸「太刀山」を醸造。ラベルは八尾出身の和紙職人吉田桂介氏が漉いた和紙に、高岡出身の画家古川通泰氏が一枚一枚違う狐の絵を描いた。ラベルは剥して額に飾って楽しむこともできる。日本酒に手描きのラベルを使うのは珍しいが、古川氏の絵を機にこれまで日本酒に関心のなかった人々が購入するケースも多いという。

問 なかやす酒販㈱ ☎0766・25・9000

鋳物工房　利三郎

身近な伝統工芸品に出会える店

金屋町は高岡鋳物産業発祥の地として知られ、現在も伝統的な千本格子の町並みが残されている。利三郎はこの町の一角で伝統工芸品を中心に展示、販売する土産物店。家主の神初宗一郎さんは、長年にわたって茶道具を制作する鋳物職人で四代目利三郎を名のる。店は夫人の良子さんが"金屋を訪れる人にもっと地元の伝統工芸を知ってもらいたい"と平成六年の秋から営業している。

しっとりと落ち着いた佇（たたず）いの店内には地元作家から集められた鋳物、漆、陶器、ガラス作品などが並ぶ。シューウィンドーを設けなかったのは、作品を直接手にとってその風合いを感じとってもらいたいという店の方針。買い物だけでなく、店主とお茶を飲みながら、鋳物の歴史や文化の話を聞くのもいい。時間が合えば奥の工房も見学させてもらえる。

問 鋳物工房利三郎 ☎0766・24・0852

高岡地域地場産業センター「新クラフト品コーナー」

選りすぐった暮らしを潤す新クラフト

高岡地域地場産業センターの一階売り場の一角に、新しいクラフトの魅力を県内外に広くアピールする「新クラフト品コーナー」が新登場した。

島田専務理事は「ここ数年来、地場企業や伝統工芸士による新商品の開発が活発に行われており、誕生した斬新なデザインの銅器や漆器などをお客様にも見ていただこうと、平成八年九月にオープンしました」と、新設のきっかけを説明する。

新コーナーにはテーブル&デスクウエアを中心に、カトラリーセットや栓抜きから、置き時計やテーブルカッターまで、アイテム数は約一三〇。カジュアルでセンスがよく、毎日使いたくなる商品が所狭しと並んでいる。

「現代の暮らしに合ったモノをなるべく手頃な価格でというのがモットーですから、気の利いたお土産や贈り物を捜している方はぜひ一度ご覧ください。商品の入れ替えも随時行う予定ですので、学生さんを含む若手のクラフト作家には、作品の積極的な売り込みを期待しています」（島田氏）。

問 ㈶高岡地域地場産業センター ☎0766・25・8283

工芸都市高岡96クラフトコンペ

二十周年に向けて新たな一歩

十一回目を迎え、テーマが「新しいクラフトをもとめて」に変わったクラフトコンペ。今回の応募総数は一二八一点。これで六年連続して二千点を突破したことになり、全国のクラフトマンにその名が浸透したことを印象付けた。

「クラフト展」の会場となった高岡文化ホールには、入選作品七一四点が展示され、初日から作品を買い求めるファンで賑わった。

作品の売れ行きには、消費者のニーズが反映される。審査員とは一味違うこの評価も、出品者や地元産業の関係者にとっては気になるところだろう。一方で、「現品限り」の作品が目立ったことを今回の問題点として指摘する声もある。作品を購入できることが魅力のクラフト展だけに、事務局では「適正価格で追加製作が可能」という応募規定を徹底させたいとしている。まだまだ課題が残るものの、新たな一歩を踏み出したクラフトコンペの今後に注目したい。

問 高岡商工会議所内クラフトコンペ事務局 ☎0766・23・5000

DESIGN TOPICS

[96年度デザインの動向]

(左)『twinkle² little star』／駒沢恵（高岡市・グラフィックデザイナー）
(上)『トイレタイム』／島沢和美子（高岡市・グラフィックデザイナー）

「第11回国民文化祭とやま96」事業ポスター

地元クリエーターが文化の祭典に貢献

文化の祭典「国民文化祭とやま96」の事業ポスター一七点が、高岡市をはじめ富山県内のクリエーターによって制作された。富山県から制作依頼を受けたのは富山県デザイン協会で、デザイナーの全国組織に依頼することが慣例となっていた同文化祭では初の試みである。富山県独特の文化や風土をテーマにした事業もあり、地域に精通した地元クリエーターの企画力に期待が寄せられた。

ポスターは、同文化祭に先駆けて開催された「公式ポスター展」をはじめ、事業PRの一環として県内外で展示された。また、デザイン協会は、一連のポスター制作が評価され「第四回とやまクリエーター大賞」（主催・富山広告協会）に選ばれている。頭川事務局長は「地元のデザイン力をアピールする絶好の機会になった。英断に踏み切った富山県と、期待に応えたメンバーに感謝したい」と話している。

(問)㈳富山県デザイン協会☎0766・26・4701

第36回富山県デザイン展

ユニークなオリジナルクロックが勢揃い

テーマ作品のクロック〈課題提供／タカタレムノス〉に、幅広いジャンルのクリエーターや一般の応募者から七〇点が寄せられた。募集テーマは「掛け時計の文字盤と針のデザイン」。直径約三〇センチのクロックを、既成のイメージにとらわれない自由な発想でデザインするというものだ。「こんな時計が欲しい」をデザインした作品が多く、出品者にも楽しめるテーマとなったようだ。ガラスや金属など使われた素材もさまざま。

タカタレムノス賞に選ばれた『twinkle² little star』は、「黄色のグラデーションが黒とのコントラストに輝く効果的なデザイン」と審査員の評価が高い。また、奨励賞に選ばれた『トイレタイム』は、同社から商品化される予定で、早ければこの春にも市場に登場するという。

(問)㈳富山県デザイン協会☎0766・26・4701

富山プロダクトデザイン・コンペティション1996

新しい潮流を生み出す可能性に賭ける

デザインウエーブ開催委員会（富山インダストリアル・デザインセンターなど）の主催によって毎年開催している『富山プロダクトデザイン・コンペティション』の一九九六年受賞作品が決定した。

このコンペは、地元の産業界を活性化し、新しい市場の創出を図ることを目的としており、過去二回の実施によって、すでに四点の商品化を実現している。三回目となる今回は、高岡市の竹中製作所（課題／景観ツールとしてのボラード）を含む四社からの提出課題に対し、商品化を前提とした三四六点の作品が寄せられた。

その中からデザイン大賞に選ばれたのは、ルーフボックス（課題提出企業／魚岸精機工業）を共同デザインした橋本修二さんと大田信市さん。アルミフレームとキャンバス地を使用し、軽量化、低価格化、コンパクト化を追求したこの作品は、「未完成ではあるが、デザイナーはもちろん、作る側にもチャレンジさせるエネルギーがある。その結果が新しい市場を創りそうだ」という評価を得ての受賞となった。

入賞、入選作品五二点は、高岡工芸高校「青井記念館美術館」において、平成八年十月三十一日から十一月十日まで展示された。

(問)デザインウエーブ開催委員会事務局 富山インダストリアル・デザインセンター内☎0766・25・5039

デザイン大賞／ルーフボックス（自動車搭載用）

高岡がよく見えるホームページ

『ほっとホット高岡』へCLICK! CLICK!

『ほっとホット高岡』は、高岡の魅力を全国へ、世界へアピールするため、高岡市がインターネットに開設したホームページ。高岡万葉情報、観光・物産情報、産業情報など、高岡の特色を生かした楽しめるページ構成が特長だ。ぜひアクセスしてほしいのが、ユーザー同士やユーザーと行政との情報交流の場として設置された交流広場のページ。掲示板にメッセージを書き込むだけなので、初心者でも気軽に参加できる。あなたの町のイベントPRや探し物など、会ったこともない人からホットなメッセージが届くわくわくぶりは、一度味わってほしい。

http://www.city.takaoka.toyama.jp/

〈一般部門〉最優秀賞／三協アルミスポーツセンター・サンアリーナ

〈住宅部門〉最優秀賞／竹田邸

高岡都市美景観賞

環境デザインへの意識高揚を図る

優れた都市景観を創出している建造物を表彰する「平成八年度高岡都市美景観賞」が実施され、昨年九月、各賞が決定した。今年度は、個人住宅と大型施設、ビルを同じ条件で審査するのは公平でないとして住宅部門と一般部門を分離。住宅部門では白金町の竹田雄一郎邸、一般部門では三協アルミニウム工業スポーツセンター・サンアリーナが最優秀賞に選ばれた。

審査は平成六年以降に建設された建造物で応募のあった四三件について行われ、池田満寿夫氏をはじめ七人のデザイナーや建築家が選考した。竹田邸は不利な条件にもかかわらず周囲の環境への配慮の素晴しさと和風の土壁の美しさが評価され、サンアリーナはアルミを大胆に採用し、これからのアルミ建築に活気的な期待と展望を提供した点が支持された。

(問)高岡市都市整備部建築指導課☎0766・20・1409

〈一般部門〉優秀賞／おばんざい さらそうじゅ

〈住宅部門〉優秀賞／岡島邸

〈一般部門〉優秀賞／身体障害者療護施設 志貴野ホーム

〈住宅部門〉優秀賞／高橋邸

高岡市で二カ所登録有形文化財選定

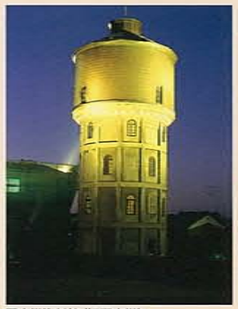
古き良きモダン建築が文化財に

文化財保護審議会は「文化財登録制度」の対象に全国で一一九件を選定、富山県内では四件、うち高岡市内から伏木湊町の高岡商工会議所伏木支所（旧伏木銀行）と清水町の配水塔資料館（旧配水塔）を選んだ。

高岡商工会議所伏木支所は明治二十九年に設立、同四十三年に再建された建物で、土蔵造りに洋風デザインを取り入れた銀行建築。玄関にポーチをつけるなど当時としては斬新なスタイルだった。一方、配水塔資料館は昭和六年に建設。鉄筋コンクリート造四層の上に銅版張りの貯水槽が載っており、昭和初期の最新技術を集めた街のシンボル的存在だった。

今回、県内から四件選定されたのは北信越地区で最も多い。これは富山県が全国に先駆けて文化財建造物についての基礎調査を行い、詳細なデータを整えていたためである。

(問)高岡市教育委員会文化財課☎0766・20・1453



配水塔資料館（旧配水塔）

高岡商工会議所伏木支所（旧伏木銀行）

地元デザイナーの活躍

コンペでデザイン力を発揮

高岡市で活躍するグラフィックデザイナーの作品が、富山県で実施されたデザインコンペにおいて相次いで高い評価を受けた。

国際ポスター展〈公募ポスター展〉

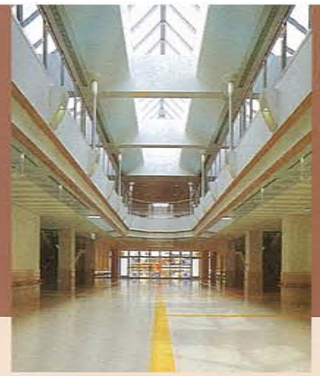
「第11回国民文化祭とやま96」の一環として全国公募された〈公募ポスター展〉では、中嶋和也さんの作品がグランプリに相当する文部大臣奨励賞に選ばれた。募集されたのは、「水」をテーマにしたB全判のポスターで、応募総数は四五四点にのぼった。中嶋さんの作品は、清水の象徴としてホタルをモチーフにしたイラストで、水の大切さを訴えている。

富山県のさかなシンボルマーク

平成九年一月には、またひとつ富山県のシンボルが誕生した。富山県が募集していた「富山県のさかなシンボルマーク」である。採用された久郷隆さんの作品は、『ブリ』『シロエビ』『ホタルイカ』と、それらの集合マークの計四種類で、季節感や富山県らしさをうまく表現している。今後は県や関係機関のPRのために幅広く活用される。

DESIGN TOPICS

［96年度デザインの動向］



エントランスホール

高岡おとぎの森公園
現代版「おとぎの国」をめざし、新しい街の、新しいランドマーク誕生

近年、着々と開発が進む高岡市南部に、新しいランドマークともいえる総合公園が誕生した。平成八年十月にオープンした『高岡おとぎの森公園』で、建設省の「平成記念子供のもり公園」事業の指定（平成三年九月）を受けて整備が進められている。

同公園は「自然と遊び、自然に学び、友とふれあう」を基本テーマに、子供のための環境ということが重視されている。広さ十一・二haの敷地中央には千保川（一級河川）が流れ、子供たちが安全に水遊びができる仕掛けが随所になされている。また、シンボルである「おとぎの森館」は一本の大樹をイメージして設計。モニュメントは葉、円筒形の展望台は幹、扇状に広がる屋根は枝や花、一階の柱部分は根を、表現している。館内には、動植物の生態系を学習できる「地下回廊」や、映像で森の神秘を体験できる「スライドシャワー」などが設けられている。

第13回全国都市緑化とやまフェア開催時の高岡おとぎの森公園

ところで、このおとぎの森公園はまだ完成したわけではない。平成八年七月十二日から五十二日間にわたり、第13回全国都市緑化とやまフェアのメイン会場として活躍した後、現在、一般開放しながらも引き続き工事が行われている（平成十五年度完成予定）。今後の造成計画には、大型の木製遊具が設置される「冒険の森」や昆虫採集ができる「観察の森」、隠れ家にぴったりな「風の砦」など、子供たち目らが遊びを創造するプランが数多く盛り込まれている。子供たちのいきいきとした姿を大いに想像させてくれるものといってよいだろう。

問 高岡市都市整備部公園緑地課☎0766・20・1416

高岡市ふれあい福祉センター開館
高齢者にやさしい設計・デザイン

高齢社会の到来にあたり、近年は公共建築の設計・デザインにも高齢者への配慮が求められるようになっている。

昨年六月に開館した高岡市ふれあい福祉センターは、デイサービスやボランティア、健康と生きがい事業などを行う総合福祉施設。高齢者や障害者の利便性を考慮したさまざまな設備設計が施されている。

エントランスホールをはじめ、館内は段差をなくしたバリアフリー設計を採用。二階まで吹き抜けになった天井にはトップライトを設け、明るさと開放感を演出している。また床は滑りにくい素材を使用し、点字ブロックと音声付磁気誘導装置を整備して視覚障害者もスムーズに館内移動できるようにした。このほかにも通路幅を広げ、階段や浴室、トイレなどに手摺りを設けるなどきめ細やかな配慮が見られ、利用者はもちろん、福祉事業関係者の関心を集めている。

問 高岡市ふれあい福祉センター☎0766・21・7888

伏木マイロード事業
石畳の坂道に万葉ロマンの風が舞う

高岡市伏木はかつて、万葉の歌人大伴家持が越中国司として赴任した万葉ゆかりの故地。市ではJR伏木駅から勝興寺に至る門前通りを、地域の特性を生かしながら景観整備するマイロード事業を実施、昨年完成した。

整備は"万葉の歴史と文化が薫るみちづくり"をキャッチフレーズに進められ、道路は参道をイメージした石畳風に、側溝の蓋には万葉の花"がたかご"をデザインした高岡鋳物が使用された。また道路に面したポケットパークには万葉植物であるツママやツバキなどを植栽し、住民が自然に触れ、安らぐことのできる空間を演出した。道路脇にはかたかごをモチーフに、シックにデザインされた照明燈、常夜燈が設置されている。

道路にも個性が求められている時代。目的地までのアプローチが楽しい道の誕生は町の顔づくりにも一役かっているといえるだろう。

問 高岡市建設部道路建設課☎0766・20・1412

私と高岡クラフトコンペ

羽生　野亜
クラフト作家

羽生　野亜（はにゅう　のあ）

1965年　神奈川県生まれ
1989年　多摩美術大学卒業
1989・90年　㈱GK勤務
1995年　朝日現代クラフト展奨励賞
1996年　朝日現代クラフト展招待出品
　　日本クラフト展グランプリ
　　工芸都市高岡クラフトコンペグランプリ

自分が本当に何を使いたいのか、極めて個人的な考えからモノづくりは始まる。

作家活動に専念して四年、公募展初エントリーから二年、ブナを素材とした「酒卓十五」で、見事『工芸都市高岡96クラフトコンペティション』のグランプリを受賞した羽生野亜さん。公募展出品のきっかけを尋ねると、

「作品ができて、それを売りたいと思った時に、肝心の発表の場がなかった。デパートもギャラリーも、無名の作家は扱ってくれない。そんな関係者との出会いを求めて始めました」

と、こんな答えが返ってきた。

「僕が、何かをつくろうとする時は、まず自分自身を"ユーザー"に設定し、本当に使いたいモノを模索しながら、形や素材で表現していきます。今回の受賞作品には、そんな自分の中の欲求が素直に出ていると思います」。

羽生さんは、六年前、自分の考えを表現できる仕事がしたいと、工業デザイナーからこの世界に身を投じ、長野県の職業訓練所で木工技術の基礎を一年間学んだ。

「普通だと卒業したら、しばらくは職人さんに弟子入りするのが筋なんでしょうが、すぐ一人でモノづくりを始めてしまいました。僕にとって技術を学ぶことは、逆に危険だと思ったからです。技を覚え、熟練すればするほど、それに縛られてしまうと。もっと腕を上げていたら、恐らく今の作品はなかったでしょうね」。

作品の素材として使われているのは、圧倒的にブナ、山桜が多い。

「特殊な技術を使っているので材料が限定されるんです。例えば、刃物を研がずに使ったり、逆目を出したりと、"敢えて"雑につくるので、少し堅めの広葉樹を選んでいます。

何百年も前に建てられたお寺の柱や、博物館にあるような昔の道具が放つ朽ちた風合いは、見ているだけで心が和むでしょう。それこそ、本当の木の良さだと僕は思うのです。それを人工的に表現できないものか、という思いが出発点でした」。

最後に、高岡クラフトコンペの再挑戦について尋ねると「審査員がデザイナーという点で、他の公募展とは違う面白さはあります。が、まだ先のことなので分かりません（笑）。今年は、展示会と個展でスケジュールがいっぱい。せっかくつかんだチャンスだから、しばらくは作品の発表の方に力を入れようと思っています。待ってるだけじゃ、何も始まりませんから…」。

高岡96クラフトコンペでグランプリを受賞した「酒卓十五」

「酒卓二十四」と山桜の「盛器」

MADE IN TAKAOKA SELECTION

「メイド・イン・高岡」セレクション

「モノづくりの町」と形容されるとおり、いま高岡では、新技術を駆使してデザインされた商品やコンペ入賞作品を商品化したプロダクトなど、素材、技術、デザインにこだわったモノがいくつも生まれています。今回は、その中から、暮らしを楽しく彩る身近な商品を集めてみました。使い心地のいい「お気に入り」、こだわりの高岡ブランドの中から見つけてみませんか。

1 仏具「つるかめ具足」

現代的な生活空間にもぴったりマッチする新感覚の仏具。馬場忠寛氏デザインによる洗練されたフォルムと、表面処理の新技術マルモプラスが放つ不思議な輝きが印象的です。

●サイズ／花立…φ7.5×H9.0㎝、火立…W6.0×H14.5×D4.5㎝、香炉…φ9.5×H6.0㎝ ●素材／銅合金 ●価格／花立…17,000円、火立…12,500円、香炉…18,500円 ●問合せ／㈱山口久乗 ☎0766・22・0993

2 「車止め」

時を重ねるごとに都市景観に調和するストリートファニチャー。変貌するブロンズ特有の風合いに、異素材を組み合わせた独特のデザインが魅力です。

●サイズ／W44.0×H90.3×D20.3㎝ ●仕様／ブロンズ ●カラー／青銅・朱銅・琥珀 ●価格／224,000円 ●問合せ／高岡銅器団地協同組合 ☎0766・63・5005

3 アラームクロック「GooGoo」

ニワトリかヒコーキか？ パタパタ飛びそうなカタチで、お目覚めタイムをしっかりアラーム。富山プロダクトデザインコンペ'94の入選作品（浅井知成氏）を商品化したオシャレな目覚し時計です。

●サイズ／W8.5×H10.5×D12.5㎝ ●主材／ABS樹脂 ●クオーツ式●カラー／レッド、イエロー、など6色 ●価格／4,800円 ●問合せ／㈱タカタレムノス ☎0766・24・5731

4 「大輪」

花器とテーブルを組み合わせたモダンなインテリア。澄川伸一氏（プロダクトデザイナー）のデザインによる造形美が、漆の深い色艶と溶け合い、現代の生活空間に安らぎのひとときを演出します。

●サイズ／φ47.5×H78.5㎝ ●素材／木製・カシュー仕上 ●カラー／ご要望に応じます ●価格／60,000円 ●問合せ／天野漆器㈱ ☎0766・23・2151 ※花は演出用です。

5 オリジナル・アルミホイール

金型製造が一般的ですが、これは独自の鍛造削り出し製法（NC・MC機の超精密加工）なので、自分だけのオリジナル・アルミホイールが1セットからオーダーできます。なお塗装も可能です。

●サイズ／15～18インチ（全オフセット対応可能）●素材／アルミ合金 ●価格／デザインにより異なります ●問合せ／ワシアルミ㈱ ☎0766・21・2345

6 「テープディスペンサー」

富山プロダクトデザインコンペ'95のデザイン大賞作品（菅野傑氏）を商品化。地球に優しいリサイクルアルミを使用し、クラフト職人の高度な技術によって造られたこだわりのデスクウエア。

●サイズ／W13.4×H11.5×D4.5㎝ ●素材／アルミニウム ●カラー／グリーン、シルバー、ブルー ●価格／9,800円 ●問合せ／㈱ニューズ・インターナショナル ☎0766・28・2210

7 「ニューカラフルコート」

動きやすさとコンパクトな収納性を追求したパーカースタイルの防水スーツ。平成8年度グッド・デザイン商品に選定された、優れたデザイン性も魅力です。

●サイズ／M・L・LL・3L ●素材／ナイロン100%（PVCラミネート） ●カラー／ダークミント、イエロー、など5色 ●価格／4,500円 ●問合せ／鍛治産業㈱ ☎0766・23・3322

8 「凡の盆」

黒川雅之氏（建築家・プロダクトデザイナー）による〈百の盆〉を商品化したもので、コンセプトは「現代の生活に似合うお盆」。シンプルなデザインが、螺鈿の新しい魅力を引き出しています。

●サイズ／角盆黒…33.0×33.0㎝、丸盆朱…φ30.0㎝ ●素材／木製・カシュー仕上 ●価格／角盆黒…10,000円、丸盆朱…8,500円 ●問合せ／高岡漆器㈱ ☎0766・21・0262

9 ガーデンチェア「EDEN」

凛としたフォルムが印象的です。造形的にも優れ、アルミ鋳物製ながら座り心地もネーミング通り楽園気分そのもの。富山プロダクトデザインコンペ'94の入賞作品（林秀行氏）を商品化したものです。

●サイズ／W54.0×H71.0×SH44.0㎝ ●素材／アルミ鋳物 ●カラー／ホワイト ●価格／65,000円 ●問合せ／㈱竹中製作所 ☎0766・22・0566

10 血行促進・保温靴下

光電子セラミックを練り込んだ繊維〈ファーベストファイバー〉製の靴下。とうがらしエキスを配合したソックス〈カプサイシン〉。どちらも、血行促進や保温に優れた効果を発揮します。

●サイズ／婦人22.0～24.0cm、紳士24.0～26.0cm ●価格／①④ファーベストファイバー製靴下…700円～、②③カプサイシン…500円～ ●問合せ／助野靴下㈱高岡支店 ☎0766・26・3001

●商品の仕様については、予告なく変更することがございます。また、掲載されている商品の色は、撮影や印刷などの諸条件により、実際と多少異なる場合がございます。あらかじめご了承ください。
●表示価格には消費税は含まれておりません。●表示価格は平成9年3月現在のものです。